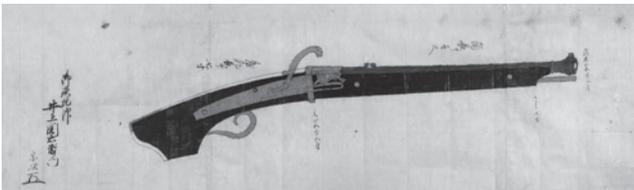


## 2022 年度なにわ大阪研究センター事業紹介

関西大学なにわ大阪研究センターでは、センターがめざす「ネットワークとしての大阪研究の拠点づくり」を支援するために本センターの活動方針の中核ともいえるべき研究領域・テーマを設定しています。これらを足掛かりとして、本センターにおける地域研究と連携の活動が一層重層化されるとともに、今後の継続的な外部資金獲得の基盤が形成されることが期待されています。

### 2022年度【基幹研究班】

研究領域・テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信</li> <li>鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究</li> <li>豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承</li> </ul>
研究課題	なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化
研究代表者	乾 善彦 文学部・教授 なにわ大阪研究センター・センター長
研究概要	<p>本研究は、基幹研究テーマのうち、①道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信、②鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究、④豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承の三つのテーマに取り組むものである。</p> <p>①については、松竹座を含めた大正末から昭和初期の景観のCG化に着手することに加え、CGの英語版の作成も目指す。</p> <p>②については、2021年度に引き続きCG等のデジタルコンテンツの作成を推進し、加えて、鑄造技術の復元等、鑄造過程の可視化など、新たな展開を予定しており、2023年度の完成を目指す。</p> <p>④については、これまでに当研究センターにおいて、豊臣期大坂図屏風のデジタルコンテンツの作成が進められていたが、エッゲンベルク城博物館との提携の継続を受けて、大坂図屏風の高精画像を閲覧するWebページおよび360°パノラマ画像を用いたWeb 3Dコンテンツの作成準備を行い、2025年度の完成を目指す。</p> <p>(計画)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信</li> <li>鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究</li> <li>豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承</li> </ol>
	 
研究分担者	林 武文 総合情報学部・教授 なにわ大阪研究センター・副センター長 藪田 貫 関西大学名誉教授 井浦 崇 総合情報学部・教授 橋寺 知子 環境都市工学部・准教授 丸山 徹 化学生命工学部・教授 北川 博子 関西大学非常勤講師
研究期間	2022年度（1年間）

2022年度～2023年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学昇格を果たした1922年以降、大大阪時代の各分野で活躍した本学所縁の人材の発掘と大学の足跡を探る研究</li> </ul>
研究課題	「大大阪」の時代と関西大学—山岡家文書の調査・研究を中心に—
研究代表者	官田 光史 文学部・准教授
研究概要	<p>本研究の目的は、山岡家文書（山岡順太郎・倭の旧蔵資料）の調査・研究によって、関西大学関係者の活動という視点から、「大大阪」時代の政治や社会のあり方に光を当てることである。とくに山岡が本学の総理事や学長などとして本学の経営・教育に携わった1920年代の資料を重点的に調査・研究することで、山岡をはじめとする本学関係者が「大大阪」の形成と発展に貢献した姿を描き出すことを目的とする。</p> <p>また、本研究の特色は、山岡家文書という質・量ともに充実した資料を初めて本格的に研究することであり、そのポイントは①山岡家文書の調査・研究、②「大大阪」を支えた大阪市役所・大阪市会の校友の調査・研究、③「大大阪」のツーリズム研究の3点である。</p> <p>これらの研究の集大成として、最終年度には講演会を開催するとともに、山岡家文書に係る講演資料を作成する。講演会については、1920年代の東京など、他の都市と大阪の比較も視野に入れて企画する。山岡家文書の目録は、新出資料の基礎データとして、大阪・関西の地域史研究はもちろん、日本近現代史研究に大きなインパクトを与えると期待している。</p> <p>(2022年度)</p> <p>①仮目録の作成とともに重要資料の翻刻を進め、山岡を中心とする政官財界のネットワークの広がりを解明する。</p> <p>②山岡家文書、さらには大阪市史編纂所所蔵の地域資料、大阪市公文書館所蔵の公文書のなかから大阪市役所・大阪市会の校友に関する資料を収集する。それらの資料と『大大阪』などの雑誌・新聞の記事を合わせて検討を加える。</p> <p>③山岡倭の旧蔵資料のなかの観光パンフレットを分析する。</p> <p>(2023年度)</p> <p>研究成果に基づいて講演会を開催するとともに、山岡家文書に係る講演資料を作成する。</p>
研究分担者	米田 文孝 文学部・教授 伊藤 信明 博物館・学芸員
研究期間	2022年度～2023年度（2年間）

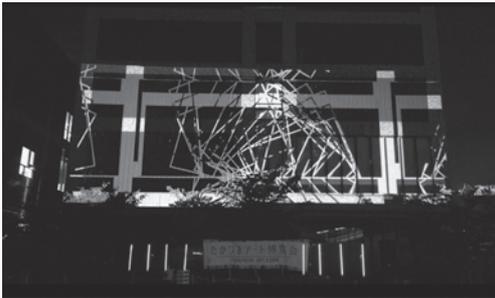
## 2022年度～2023年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究（大阪の都市景観の変遷）
研究課題	大阪の失われた景観・残る景観 —戦後昭和・平成の大阪を捉えた風景写真集・絵画を用いて
研究代表者	岡 絵理子 環境都市工学部・教授
研究概要	<p>本研究では、戦後復興、またはその後の「都市再生」が行われる直前の1990年ごろまでの写真や絵画を用いて、都市の更新により失われた様々な大阪の景観を見出すことを目的としている。具体的には、主に戦後1990年ごろに撮られた写真・絵画と、同じ場所・同じ視点場で写真を撮影し、その両者を比較し、その場所の何が失われ、何が残されたのかを検証する。さらにそこに起こった都市計画的出来事を調査し、記載する。これらから、戦後昭和から平成にかけての大阪の景観の変遷と、その背景にあった文化・都市行政などの社会的状況の変化との関連性を浮かび上がらせることができると考える。</p> <p>大阪の景観構造を歴史的視点から考察した研究は、「浪花百景」や「摂津名所図会」などを用いた近世を対象とした景観研究が複数ある。また、近世、近代においては、中之島、御堂筋、橋梁、大阪駅など、大阪の景観を代表する「部分」の景観研究が多くを占めている。</p> <p>しかしながら、近年「都市再生」が盛んに行われるようになり大阪の町の再開発・更新が進んでおり、大阪の景観構造にも大きな変化が見られることは周知であるが、これらを扱っている研究はほとんどなされていない。大阪の景観変遷の特徴とも言える「移ろいやすさ」の要因について、都市景観・都市計画と建築史の視点から解明しようとする点を、本研究の特色の第一とし、明日の都市景観・都市計画のありようを担うであろう、次世代の育成を、第二の特色としたい。</p> <p>(2022年度・2023年度)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 対象とする写真・絵画の選定</li> <li>2. デジタルデータの作成</li> <li>3. 写真・絵画の視点場（地点）確定</li> <li>4. 写真・絵画の同じ視点場での写真撮影</li> <li>5. 写真の現在の写真、絵画と現在の写真の比較と変化・変容の確認</li> </ol> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
研究分担者	橋寺 知子 環境都市工学部・准教授 宮地 茉莉 環境都市工学部・助教
研究期間	2022年度～2023年度（2年間）

2021年度～2022年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界遺産登録を視野に入れた明日香村との共同研究 (発掘50周年を迎える高松塚関連の研究をはじめ飛鳥の歴史的文化遺産に関連する研究)</li> </ul>
研究課題	甘樫丘遺跡群の基礎的研究—発掘調査の成果を中心に—
研究代表者	井上 主税 文学部・教授
研究概要	<p>本研究は、飛鳥地域に所在する甘樫丘遺跡群を対象とし、発掘調査を通じて得られた資料のほか、『日本書紀』などの文献史料にみられる記録などをもとに、本遺跡の性格や歴史的な意義について考察することを目的とする。</p> <p>発掘調査を通じて、飛鳥時代に権勢をふるった蘇我氏本宗に関する資料が確保されれば、この時代の研究においては非常に大きな意義をもつ。また、飛鳥地域では墳墓や寺院、宮殿を対象とした研究が中心であったが、これに邸宅という新たな研究の進展も期待される。</p> <p>なお本学と明日香村は、2020年9月に学術・文化交流の更なる深化を目指して、「学術・文化交流に関する覚書」を締結しており、本研究はこれに基づいて明日香村教育委員会との共同研究という形で推進する。</p> <p>①研究代表者と研究分担者で研究方法の確認と、発掘調査の予定について協議し共有化を図る</p> <p>②本学考古学研究室に所属する学部生、大学院生が発掘調査に参加する</p> <p>③遺跡の発掘調査にあわせて、研究代表者と研究分担者で現地を複数回視察。検出した遺構や出土遺物についての意見交換を行い、遺跡の時期や性格について検討する</p> <p>④2023年2月に、2か年の研究成果の取りまとめを行う。また本研究期間終了時点で、甘樫丘遺跡群の共同発掘調査は2か年分を残しているため、今後の研究推進について外部資金の獲得も視野に協議する</p>
研究分担者	西本 昌弘 文学部・教授 長谷川 透 明日香村教育委員会・主任技師
研究期間	2021年度～2022年度（2年間）

2021年度～2022年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究（大阪の防災・減災）</li> </ul>
研究課題	大阪の災害の実態解明とデジタルメディア技術を用いた防災教育
研究代表者	城下 英行 社会安全学部・准教授
研究概要	<p>本研究は、大阪の防災・減災をテーマに課題解決に向けた研究を行うことで、防災・減災に関する成果はもちろんのこと、学の総合化という地域研究のさらなる進化を目指すものであり、具体的には、以下の2つの取り組みを実施する。</p> <p>①大阪府北部地震の実態解明とそれに基づいた今後の地震災害の被害予測</p> <p>②災害経験や将来予測を活用し、来たるべき巨大災害時に有効となる防災体制を構築するための教育手法の開発</p> <p>(2021年度) 大阪府北摂地域の行政機関や団体等において、大阪府北部地震に関する多様なデータを集めるための調査を実施する。また、こうした災害経験を伝承し、防災対策につなげるための防災教育実践を行う。そして、得られた教訓をひろく発信するためにプロジェクションマッピングによる防災教育手法の開発を行う。</p> <p>(2022年度) 初年度と同様に大阪府北部地震に関するデータ収集を行う。さらに前年度に得られた成果を広く伝えるようなプロジェクションマッピングの取り組みを行う。具体的には、大阪府北部地震をテーマにしたプロジェクションマッピングを高槻市内の中学校と連携して実施する予定である。そして、当該実践を通して得られたフィードバックを踏まえて、教育手法の改善を行う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
研究分担者	奥村与志弘 社会安全学部・教授 井浦 崇 総合情報学部・教授
研究期間	2021年度～2022年度（2年間）

